

随想 「甘え」が日本を滅ぼす

どうすれば強い日本を作れるのか

弁護士 金子博人

第69回 財政破綻は回避できるか？（その5） 「かながわ州」の国造り（その3：承前）

5. 農業・漁業立国

農業は大いに期待が持てる。もともと、夏は高温多湿で土壌豊かな日本は、農業に極めて適する。アジア諸国の中間層は急激に増えているが、彼らは、日本の果実や生鮮食料品の有力マーケットだ。すでに、中国その他のアジア諸国に、相当量の生鮮食料品が輸出されているが、もっと革命的に増加させられるはずである。

当然のことながら、生産単位はヨーロッパ並みに、今の10倍くらいの広さの農地に誘導したい。それが可能な農業改革が必要となるし、流通も改革する必要がある。

かながわ州だけではないが、日本の農業は急速に崩壊しつつある。農業従事者は高齢化しているが後継者がいないからだ。農地の拡大は、州全体で明確な農業計画と、農地承継システムが用意されれば、難しいことではない。

さて、農業の発展のためには、何をどう作ればよいかの知識を提供できる農業研究施設の誘致、農業高校、農業専門学校の誘致・充実が必要である。そして、そこには県外からも、若き農業志望者を招こう。

さらに、海外からも留学生を招こう。残ってかながわ州で、農業をしてもらってもいい。さらに、ここでの研究成果は、輸出してよいであろう。農業技術とその技術者は、アセアン諸国やアフリカなどで、引く手あまたになるはずだ。

農産物を、工場で生産するという研究と実践もあるべきであろう。農業の生産方法の発展の余地は、極めて大きいはずである。

ところで、能登には、「白米千枚田」という棚田がある。ここは、県の農業課でなく、観光課が所轄という。農家は一軒残っているだけで、あとは、オーナー制度であり、伝統的な耕作はボランティアが担っているという。ここは、多くの人々を魅了する、有名な観光スポットとなっているのだ。

かながわ州には、これだけの棚田は残っていない。しかし、かながわ州に残る農地も、雄大で魅力的である。豊かな農作物を生み出すことはもちろんであるが、それは同じに都会人にとっては、絶好のハイキングコースであり、オアシスである。農作業に邪魔にならないような工夫をした上で、農地は、有力な観光資源となるであろう。

農産物の直売店を充実することを考えよう。既に色々な形で実践されているが、もっと、発展させてよい。道の駅は、新鮮な野菜や果物を提供し、リピーターができるようであってほしい。今でも、「浜なし」は飛ぶように売れ、県外に出す余裕も無い状態である。このようなブランドは、いくらでも生み出せるはずだ。

もちろん、かながわ州の農産物は、有力な輸出産物として、かながわブランドで、海外に売りまく

ろう。

酪農も、忘れるべきでない。かながわ州には、「葉山牛」というブランドもある。乳牛農家も健在だ。発展の可能性は充分だ。

かながわ州は海に面しているのだから、漁業大国を目指してもいいはずだ。農業と同じく、研究施設、専門学校等の誘致を考えてもよい。養殖のメッカとなってもよい。ただ、資源保護が重要なので、観光と連動した総合的な産業として、発達すべきであろう。

既に釣り船は多い。海岸線の道の駅で新鮮な漁貝類を売ったり、漁協直営のレストランで食事ができるとか、地引網を体験できるとか、観光業とタイアップできる。

沿岸漁業のほか、三崎という遠洋漁業の拠点もある。外国人が押し掛けるような朝市も可能かもしれない。

かながわ州は、緑が急速に失われつつあるというのも現実だ。しかし、緑は、環境の維持だけでなく、重要な観光資源である。今ある里山のうち、価値あるものを指定し、徹底的に保護すべきだ。残っている里山は貴重である。その緑は、都市住民が散策を楽しめるようにあるべきだ。

そのため、里山は整備が必要だ。間伐材や下草はバイオ発電の原料になる。かながわ州は、嫌でも大量の産業廃棄物がでるはずだが、これらをバイオ技術で有効利用することに努力しよう。

6. 芸術立国

かながわ州を芸術のメッカにしよう。州内各地に、ルールさえ守れば、自分の作品、オブジェを自由に無料で設置できる場所を沢山用意しよう。

かながわ州には、遊歩道をあちこちに開設するが、そこを歩けば自然や歴史を楽しめるだけでなく、現代アートの様々なオブジェに出会えるはずだ。壁画が自由に書ける壁も、あちこちに用意したい。

芸術祭を積極的に開催できるように、場所、補助金を用意し誘致しよう。世界にアピールできるピエンナーレやトリエンナーレが、州内のあちこちで開催されるようにあつて欲しい。優秀作品は買い上げ、永久展示の権利を与えるのもいいであろう。各国から、出品できるようにするのは当然だ。

陶芸も重要だ。但し、陶芸も国際的であつて欲しい。日本では陶芸は盛んだが、ガラパゴス的に発達して堂々巡りの状態だ。ヨーロッパの陶芸は、ルーシー・リーや、ハンス・コッパーなど、日本とは違うセンスで発達している。

まねるわけではないが、交流の場は必要だ。かながわ州は、世界の大きなうねりに乗っていききたい。そして、全く新しい陶芸が、ここから生まれて欲しいのだ。

演劇、舞踊も魅力的だ。州内各地で、普段から練習できる施設を用意し、発表の場も用意したい。施設を格安の利用料金で利用でき

るようにすればいいのだ。若者に奨学金を用意するのもいいであろう。

世界中から、芸術家がかながわ州に集まるような仕組みを作り、定住してもらえれば最高だ。

芸術は発表を伴う。それは、格の高い観光資源となる。芸術を展示させれば、観光資源として、それは効率のいい収益源となるはずだ。

外国旅行をした時、開館間際の日曜の朝、まだ人が少ない美術館で、10人ぐらいの生徒にキュレーターが絵の見方を教えている姿を見たものは多いであろう。

欧米では子供に教える訓練を受けたキュレーターが、美術館にいるのだ。このようにすれば、絵を鑑賞できる裾野が広がる。いい絵を買ってくれるマーケットが形成されるのだ。

しかし、今の日本は、このような努力を一切していない。そのため、金を出して絵を買おうという層が絵をわかつておらず、いい絵が売れない。その結果、日本から世界に影響を与える画家が生まれないという悪循環が生まれている。かながわ州は、芸術を支えることができる人間を社会に送り出すことに努めよう。

7. 医療と老人介護

これからの日本は、急激な高齢化の中で、老人介護の低コスト化

とサービスの充実をいかに両立させるかが重要な課題である。

かながわ州では、自分たちでできることは自分たちでやろうという意識の中で、ボランティアを充実し、ボランティアでできることはボランティアでやってもらうことにする。

施設は最後の手段である。在宅で、地域のボランティアが生活の支援をする体制をつくるべきだ。

ボランティア研修を充実し、支援・介護レベルを上げる。また、ボランティアの貢献は、数値化して、自分が介護を受ける時には、その点数は優先的に施設に入る権利とか、介護料に転嫁できる。つまり、順繰りに介護を伝えていくシステムを作るのである。これは、オーストラリアなど、多くの国ですでに実践している制度である。

介護はボランティアを活用しても、プロがやらなければならぬ部分は多い。しかし、人材不足は深刻化するであろう。外国から介護士などの人材を導入するのは必須である。その養成機関の充実が重要だが、かながわ州は、それを充実させよう。

同時に、医療制度を充実させた。医療の高度化は医療設備の高度化を意味する。高度医療ができる中核病院が必要だが、それは同時に巨大病院を意味する。

ホームドクターと、中核病院を両端に用意し、その間に専門病院を配置する合理的な医療システム

を構築しよう。そして、医学部が人材を育成し、提供する。そのためには、医学部の誘致が必要とらう。

そして、外国から医療ツアーを導入し、収益化も図る。もちろん、国内からも医療ツアーがあつてもよい。病院に入るのならばかながわ州へという流れが欲しいのだ。

優れた医療システムは、同時に収益を上げるシステムになるはずだ。かながわに人材が集中することが、医療システムを充実させる鍵である。収益により、看護師や介護士の待遇を向上させ、医療の内容を充実させる。優れた医療と介護のサービスを提供できる良い循環を構築しよう。

(つづく)



金子博人
(かねこ ひろひと)

金子博人法律事務所。弁護士。早稲田大学法学部卒業。同大学院修士課程(商法)終了。1977年4月弁護士開業。国際旅行法学会(IFITA)会員。大東文化大学法科大学院、日本大学法科大学院講師。市場取引監視委員会委員(東京工業品取引所)。日本ブライムリアルティ投資法人執行役員。



金子博人法律事務所

〒104-0061 東京都中央区銀座8丁目10番4号 和孝銀座8丁目ビル7階

<http://www.kaneko-law-office.jp>

掲載内容の無断転載・転用を固く禁じます。